

~~~~~

30 広大な楽しみ

~~~~~

【290】 If by leaving a small pleasure one sees a great pleasure, let a wise man leave the small pleasure, and look to the great.

【290】 つまらぬ快樂を捨てることによつて、広大な楽しみを見ることができるのであるなら、心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

「大欲は、無欲に似たり」という言葉があります。とても大きな野望を持つていると、小さなことを追いかけませんし、少々の不満は我慢できますから、側から見ているとまるで無欲のように見えるということです。

今回のお釈迦様の言葉は、これに少し似ています。

「つまらぬ快樂を捨てることによつて、広大な楽しみを見ることができるのである」。そうであるなら、「心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。」と言っています。

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸。今回は早い登場だね」

「ええ、内容は分かりやすいですからね」

「そうか。分かりやすいか？ まだ説明し終わっていないのだけぞ」

「ええ、ばつちり分かりました。内容は分かりましたが、疑問があります」

「なんだい」

「つまらぬ快樂を捨てよ、と言われてもですね、広大な楽しみを得てからなら捨てるのも惜しくないでしょうが、その広大な楽しみとやらをまだ得ていない状態では、なかなか捨てるにくだすよ」

「ああ、なるほど」

「つまらぬ快樂は頑張つて捨てた。でも、広大な楽しみがいつまでたつても得られない。というんじや、不幸で、惨めですからね。ですから、まず、広大な楽しみを得る。そして、それが得られたら、直ちに、つまらない快樂を捨てるというのじゃいけませんか。すると、何も無いという状態が避けられますけど」

「ああ、なるほど、そういうことか？ なるほどね」

「ねつ、納得できるでしょ。小松茸の言っていることが」

「いや、そうではなくて、小松茸はどのように考えているから、なかなか修行が進まないのだからと、そういうことか、

なるほどとそれが分かったって言ったのだ」

「えつ、修行が進まないことと、いったいどう関係があるのですか？」

「いいかい、小松茸。つまらぬ快樂を捨てないでは、広大な楽しみは手に入らないのだ。両手に一杯おもちゃを持っていては、黄金の皿を渡したくても渡せないのだ」

「えつ、なんですか。おもちゃを捨てると、金の皿をくれるんですか？ どこにあるんですか？ おもちゃはすぐに捨てます。ほら、捨てました。金の皿、金の皿。約束したんだから金の皿をください」

「ああ、そうだね。金の皿ね。では、捨てたおもちゃはどこだい？」

「おもちゃ、ああ、それは、例えばの話です」

「あはははは、金の皿も、例えば、じゃ」

「あはははは、屏風から、トラは出てこなかったか。残念」

「あはははは、でも、とにかく捨てるのが先じゃ。捨てること、手に入るとお釈迦様はおっしゃっておる」

「本当ですかねえ、怪しいですねえ」

広大な楽しみでも、何でもそうですが、何かを得ようとするとその準備ができていないと、なかなか得られません。古いものがまだ残っていたり、捨ててもよいものを捨てずに持

っていると、同種の新しいものは、なかなか自分の方へやってきません。

つまり、捨てないというのは、まだ、新しいものは必要でないとい心の奥の深いところで思っているから、結局、新しいものを得ることができないということになるわけです。

あるいは、新しいものが得られるということに確信がないから古いものを手放せないのだとも言えます。

新しいものを得るには、心の奥底から、きつぱりと、「古いものはもういらぬ」という「宣言」にも似た心理的な態度が必要なのです。

そして、そうすると、心だけでなく身体も一緒になって、その新しいものの獲得に動き出します。また、それは、自分の周りの人にもその「意向」が伝わりますから、ますます新しいものを得ることが容易になってくる。状況によっては、そう「宣言」するだけでとても有効なサポートも得られるということになりやすいわけです。

これは、人生を切り替えるコツでもあります。新しい人生に進みたかったら、新しい人生を得ようとする前に、まず古い人生を綺麗に捨て去ることが必要です。

さて、お釈迦様が、

「つまらぬ快樂を捨てることによって、広大な楽しみを見ることができるのであるなら、心ある人は広大な楽しみをの

ぞんで、つまりらぬ快樂を捨てよ」とおっしゃってます。

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「つまりですね。小さい快樂を捨てれば、大きな楽しみが得られるんですよ」

「そうだね」

「でも、小さい快樂を積み足していくと、大きな楽しみになるんじゃないですか」

「ああ、なるほど」

「えっ、違うんですか」

「そうだね。正しい響きがするね。でも、違うのだ」

「どこが違うのですか？」

「いいかい、欲が満足されるのを快樂と言っているのだから、欲が無くなったら、快樂も無くなるわけだ。快樂を感じることもなくなる。でも、その状態になると、広大な楽しみがあるよって言っているわけだ。だから、比較が出来ないのだ」

「よく分かりませんが……」

「いいかい、マインドは欲のために働いている。そのマインドが欲を達成した時に感じるものが快樂だ。だから、快樂を求めてマインドはひたすら働く。それはマインドの特性だ。」

よく働いている。誉めていいことだ。だが、それは、マインドが『利己』のために働いているだけじゃ。もちろんそれも大切なのだが、『利己』が消えた時の広大な楽しみを知っているわけではない」

「何ですか？ その『利己』が消えた時の広大な楽しみというのとは？」

「例えば、『欲』が消えると『愛』が溢れる。その『愛』が溢れているときに感じる温かい充実感、喜び、ちよつと言葉では言えないけど、ものすごく幸せな気持ち、ああ、生きてるっていいなああと感謝、感激になっているような感動。それは、マインドが消えて『利己』も消えてしまったときに自動的に起こるものだ。それは小さな快樂とは比べられない。宇宙的だ。広大だ」

「ああ、ちよつと待つてください。もしたら、つまり、『利己』が消えたらすぐに『広大な楽しみ』が得られるのですか」

「そうだ。得られるというより、覆い隠されていたものが、現れ出ると言った方がよい。それくらい確かに得られる。すぐに確実に得られる。得るという表現の仕方がおかしい……、取り戻すとか、気付くとか」

「ほほーっ、そういうことですか。では、捨てた後、何も無い状態になることを心配することは、全然ないですね」

「そうだね。まったく心配いらぬね。単につまりらぬ快樂を

捨てればいいだけだ。そしたら自動的にそれが見える」

「ほほー、で、どうやって捨てるんですか。笑雲先生」

「えっ、……」

「どうやって？」

「だからあ……」

「あはははは、分かってます、分かってます。修行でしょ。

修行」

「おお、すごい、小松茸も進歩したもんじや。笑雲は嬉しい」

「おかげさまで。でも、分かっちゃいるけど、なかなかできない」

「あははははは」

「あははははは」